

パリにおける医学史関連史跡・博物館の現況

牧野 洋

浜松医科大学麻酔・蘇生学講座

パリの医学史跡および博物館については数点の著書（ザイドラー・大塚恭男訳：医学史の旅・パリ，岩田誠著：パリ医学散歩，石田純郎著：ヨーロッパ医科学史散歩，など）が存在するが，刊行から年月が経過し現状との乖離が生じつつある。

私は2004年，2005年，2012年とパリの医学史関連史跡・博物館を見学する機会に恵まれた為，パリにおける医学史跡および博物館の現況を報告する。浜松医科大学麻酔・蘇生学講座ホームページ <http://www.anesth.hama-med.ac.jp/AneDepartment/masuinorekisitanpou-paris-frame.asp> 内にも補足的な情報を掲載しているので御一読願いたい。

フランスの医学史博物館といえば，開館時間が短く，英語が通じないなどの問題点が指摘されてきたが，近年では状況が一変してきている。パリ病院福祉事業局博物館（Musée de l'Assistance publique-Hôpitaux de Paris），パリ大学医学史博物館（Musée d'Histoire de la Médecine, Université René Descartes），陸軍病院博物館（Musée du Val-de-Grâce），パスツール博物館（Pasteur institute），等の各博物館は，大規模で展示内容が充実しており，立地にも優れ，開館時間は長く，専用のホームページを持つなど，非常に見学しやすくなっている。また，フランスでも近年，観光に携わる人々を中心に英語が通じ，以前ほどストレスを感じる事が少なくなった。一方，デュピュイトラン博物館（Musée Dupuytren），ムラージュ博物館（Musée des moulages de l'hôpital Saint-Louis），等の小規模博物館は，開館時間が短く一部予約が必要と相変わらず見学には不便であるが，一分野における展示物の充実ぶりはまさに圧巻である。パリの医学史博物館を探訪すると，世界をリードしたフランスの病院医学の充実ぶりと，古いものを大切に保存していく博物館文化の深さを感じる事ができる。

一方，古いものを大切にするフランスにおいても，医学史跡の一部は姿を消している。キュンストレーキの製造で有名なオズーの店はクレープ屋となり，コシャン病院中庭のビダールの胸像は撤去され，お洒落なカフェになってしまった。歴史的に価値のある物を大切に保管していく事の難しさはフランスにおいても同じなのであろう。